



TITLE:

漢代における皇太后臨朝称制と王朝権力構造の変遷(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

平松, 明日香

CITATION:

平松, 明日香. 漢代における皇太后臨朝称制と王朝権力構造の変遷. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19434>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	平松 明日香
論文題目	漢代における皇太后臨朝称制と王朝権力構造の変遷		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、両漢時代における皇太后臨朝称制および皇太后の権限の変遷を、外戚・宦官・朝官との関係に留意しつつ通時的に論ずる。</p> <p>〈序論〉漢代の特色として皇太后臨朝称制が継続したことを指摘し、研究史を確認した上で、本論文の特徴として、(1)前漢を前・後期、後漢を前・中・後期に区分した上で時代的な変化に重点を置くこと、(2)皇太后だけを孤立的に扱うのではなく、外戚・宦官・士人官僚との関係をあわせて検討すること、を確認する。</p> <p>〈第一章 前漢代における皇太后政治介入の変遷と外戚輔政〉：前漢における皇太后の政治介入の変遷を論ずる。〈第一節 前漢前半期における皇太后の政治介入〉</p> <p>〈第一項 呂后による執政〉：前漢初の臨朝称制を行った呂后は、軍事面では呂氏を重用したが、政策決定には異姓の大臣も利用した。〈第二項 文帝期・景帝期・武帝期初年における皇太后の政治介入〉：この傾向は、薄太后・竇太后・王太后の政治介入においても同様であった。前漢前半期は皇帝の意思決定に関与する官が未発達で、官位を持たない皇帝の家族が政治に介入しえた。皇太后は外戚・外戚派官僚を介さず、皇帝の意思決定に直接関与した。〈第二節 前漢後半期における皇太后の政治介入〉</p> <p>〈第一項 側近政治と外戚集団の政治的擡頭〉：武帝期に皇帝の側近集団たる内朝官が登場し、外戚の就任が常態化した。外戚領袖は、皇帝に近侍し、政策決定を輔佐した。〈第二項 皇太后の政治介入における外戚利用—元后・傳太后を中心に—〉：皇太后の政治介入の手法も変化し、内朝に広く配置された外戚や、外戚を介した丞相・御史大夫の上奏を利用するようになった。〈第三項 元后の臨朝称制〉：元后は皇帝を代行する権限を有し、漢王朝保持を望んだが、外戚による宮廷内の人脈形成、皇太后の輔政者選択の狭窄化により、皇太后の輔政者が外戚に一本化されたことが、王莽の篡奪を成功させた。</p> <p>〈第二章 後漢時代の皇太后臨朝称制とその側近勢力〉：後漢における皇太后臨朝称制の推移を論ずる。〈第一節 皇帝代行者としての皇太后〉</p> <p>〈第一項 臨朝称制と新帝指名〉：皇太后は臨朝称制すると政権を終身握り、新帝の指名権さらに廃位の権限までも有した。〈第二項 功臣家による皇后位独占〉：皇后を出す家が限定され、皇后個人も子の有無は問われなくなり、その地位は安定した。〈第三項 皇太后を中心とする皇帝輔弼のありかた〉：皇太后は周囲に側近を集め、朝議を利用し、外戚の処罰も可能であった。鄧太后は約十五年間にわたり安定政権を維持しえた。後漢前半まで皇太后臨朝称制が長期的・安定的に維持される環境が整っていた。〈第二節 外</p>			

戚勢力の変質—宦官との連合を中心に—〈第一項 宦官の擡頭〉〈第二項 安帝親政期から閹太后臨朝時の宮廷勢力〉：政治集団としての宦官擡頭の要因は、安帝親政後の耿氏・閹氏など複数勢力が存在した宮中状況に求められる。排他的優位性を持つ外戚が不在の宮中において宦官・乳母の政治力が求められ、安帝崩御後、閹氏は士人官僚よりも宦官を重視した。〈第三項 外戚・宦官の相互依存—梁氏政権の特徴—〉：梁太后臨朝称制期にも、外戚は宦官と提携を続けた。大將軍の首都常駐化、宦官との提携により、外戚の政治的発言力は巨大化し、皇太后の力を必要としなくなった。皇太后は、政策立案の権能を喪失した。〈第三節 嫡母の失墜〉〈第一項 嫡母の相対的地位低下〉：桓帝親政期～靈帝期、嫡母以外、特に実母の擡頭が、皇太后の地位・政治的権限の相対的低下を加速させた。〈第二項 皇太后・外戚の間隙〉：皇太后は、宦官を必要不可欠としたが、外戚は宦官を排除する傾向にあった。宦官・外戚の分裂で、皇太后臨朝称制は機能不全に陥った。

〈第三章 後漢安帝期における宮廷勢力の変容—外戚・宦官・士人官僚を中心として—〉：転換期としての安帝親政期・閹太后臨朝称制期を、鄧太后臨朝称制期と比較検討する。〈第一節 安帝親政期の外戚、耿氏と閹氏〉：安帝親政期には外戚耿氏・閹氏が拮抗並立した。〈第二節 宦官、乳母の擡頭〉〈第一項 鄧太后臨朝称制期の宦官〉：鄧太后臨朝称制期、鄧氏は尚書台以下、官界に広いネットワークを築き、安定政権を維持し、鄧氏に対する批判にも宦官との提携は見えず、宦官の政治参与が加速度的に進んだとはみなせない。〈第二項 安帝親政期から閹太后臨朝称制期にかけての宦官、乳母〉：安帝は、自派の官僚を尚書台に集める一方、宦官の顧問応対を参照した。外戚は政治的発言力を強めた宦官と提携し、安帝への影響力を保持した。

〈第三節 中央政権における士人官僚〉〈第一項 安帝親政期における鄧氏派官僚と皇太子廃位〉〈第二項 安帝期における反鄧氏官僚および尚書と外戚派官僚〉：安帝親政期には鄧氏派官僚が一定数残留していた。安帝は反鄧氏派官僚を招聘して対抗し、尚書台は反鄧氏（反外戚）の色が濃くなっていった。〈第三項 閹太后臨朝称制期の官界と尚書〉：閹氏は、鄧氏派官僚を招聘して、反外戚の尚書官僚を牽制したが、安帝親政期に皇太子（後の順帝）廃位を敢行したことで、官界の反感をかっており、尚書以外の士人官僚とも良好な関係を築きえず、宦官への依存度が高まった。

〈附章 後漢代における外戚政権と尚書台〉：尚書台人事を分析することで、外戚政権の尚書台との関係を考察する。〈第一節 後漢代における尚書の構造と録尚書事〉：録尚書事による尚書台の掌握・統御は疑わしく、竇氏政権・鄧氏政権では、政権運用の基盤ではなかった。梁冀は録尚書事であったが、尚書官僚を掌握しえなかった。〈第二節 外戚派官僚の人事—竇氏・鄧氏・梁氏を中心に—〉：〈第一項 和帝期初年における竇氏政権と外戚派官僚〉：竇氏に批判的な官僚が尚書台にあった一方、竇憲の故吏や姻戚など竇氏派官僚は、皇帝の側近官や宮中・京城警固系統の官職に就き、尚書にはほとんど配属されていない。竇氏は尚書台人事を重視しなかつ

た。〈第二項 殤帝期から安帝期における鄧氏政權と外戚派官僚〉：鄧氏政權は「外朝」や尚書台を比較的重視する傾向があった。〈第三項 沖帝期・質帝期・桓帝期の梁氏政權における外戚派官僚と宦官〉：梁氏政權は、尚書人事をほとんど度外視した。梁冀の故吏は多く議郎を拝し、宦官との提携も顕著であった。

〈結論〉：本論文の所見を通時的に整理する。

（論文審査の結果の要旨）

漢王朝は長期持続した中国史上初の皇帝専制国家であり、その実態の解明は、中国史研究における最重要課題の一つである。漢代政治史はおおよ次のように理解されてきた。すなわち、前漢武帝期に、皇帝側近集団たる「内朝」が政策決定を担当するようになり、一般の官僚機構は「外朝」として執行機関化する。皇帝の側近政治は、後漢にも継続するが、外戚・宦官が「内朝」を牛耳ることで政策決定は混乱し、王朝は衰退に陥る。こうした否定的な理解のためか、後漢史研究は、前漢に比べて立ち後れていたが、1990年代以降、後漢の国制を中国史上の「古典的国制」として積極的に評価する見解が登場し、後漢史研究が活発化しつつある。問題とすべきは、後漢において幼年の皇帝に代わって皇太后が国政を主宰する「臨朝称制」が頻発したことである。女性である皇太后が士人官僚との接触を憚って外戚・宦官に依存したという通俗的な理解は、近年の後漢史研究にもなお伏在し、「臨朝称制」ないし外戚・宦官が皇帝専制国家に機能不全をもたらしたとする図式的理解がなお一般的である。他方、女性史・思想史研究が皇后・皇太后を扱うこともあるが、時代的变化を必ずしも考慮せず、後漢政治史の具体的な推移に「臨朝称制」を位置づけるには役立たない。本論文は、こうした研究史上の欠缺に対し、「臨朝称制」の構造とその変遷を追求することで、その歴史的評価を試みるものである。

本論文の中核は、〈第二章 後漢時代の皇太后臨朝称制とその側近勢力〉である。太后の皇帝輔弼に焦点を当てて後漢時代の政権中枢の推移をたどり、〈第一節 皇帝代行者としての皇太后〉は、鄧太后臨朝期、〈第二節 外戚勢力の変質—宦官との連合を中心に—〉は、安帝期から閼太后臨朝期、〈第三節 嫡母の失墜〉は、桓帝期以降を扱う。後漢における太后輔政の推移を三期に区分して論述し、硬直した構造論に陥りがちな制度史研究を克服しつつ、臨朝称制の実態の変化を動態的に記述することで、後漢時代の通史的記述を完成させている。精緻ではあるが些末な論題に踟躕しがちな若手研究者の現況において、一個の時代の包括的な政治過程を復元する骨太の議論は、高く評価されるべきものである。

〈第一章 前漢代における皇太后政治介入の変遷と外戚輔政〉は前漢に遡り、〈第一節 前漢前半期における皇太后の政治介入〉は、呂后および薄太后・竇太后・王太后、〈第二節 前漢後半期における皇太后の政治介入〉は、元后を扱う。武帝期に側近集団「内朝」が成立し、外戚が充填されるという通説を踏まえつつも、遡って前漢前半期の皇太后・長公主の政治介入が皇帝に直接なされたこと、前漢後半期における外戚の官僚制的登用が、元后の意志に反して、王莽篡奪の一因となったことなど独自の所見を提示する。

具体的な政治過程をたどることによって、ステレオタイプな通説的理解を克服する創見がいくつも見られる。まずその一つが後漢における宦官擡頭についてである。通

説では鄧太后臨朝称制期の宦官擡頭が想定されてきたが、本論文は鄧太后臨朝称制の具体像を解明する過程で、政治集団としての宦官がこの時期なお存在していなかったことを確認し、安帝親政期・閹太后臨朝称制期の具体的政治過程に、宦官政治集団の形成を確認する。この所見は第二章第二節にすでに述べられているが、〈第三章 後漢安帝期における宮廷勢力の変容―外戚・宦官・士人官僚を中心として―〉はそれを詳論する。安帝親政期・閹太后臨朝称制期を、鄧太后臨朝称制期と比較検討し、〈第一節 安帝親政期の外戚、耿氏と閹氏〉〈第二節 宦官、乳母の擡頭〉〈第三節 中央政権における士人官僚〉の構成で、安帝親政期の画期性を再確認する。

今ひとつの重要な見解が、尚書台についてである。通説的理解では、尚書台は、上奏文を取捨選択し、皇帝の諮問に対応することで、前漢後半から後漢にかけて、実質的な政策決定機関となり、外戚は尚書台を政権基盤としたとされる。〈附章 後漢代における外戚政権と尚書台〉は、竇氏・鄧氏・梁氏政権の尚書台人事を丹念に追跡し、鄧氏政権が尚書台を重視したのに対し、竇氏・梁氏政権はそうではなかったことを確認する。要するに、尚書台が政策決定機関か否かという問題は、その制度的権能の問題ではなく、政権の選択に大きく左右されたということになる。

このように、本論文は、皇太后臨朝称制に焦点を当てて、創見にあふれた後漢の通時的推移を描くことに成功している。政治過程の丁寧な追跡に基づく所見は、後漢史の通説的理解に修正を迫り、「身動きの取れない構造論」に陥りがちな制度史研究を克服している。近年の若手研究者に頻見する史料の誤読もほとんど認められない。

本論文にあえて疵を求めるならば、一部の行文や用語になお改善の余地が認められること、本論文の作業をさらに高い次元から俯瞰し、漢代政治史ないし国制史一般に位置付けるような議論が明示されないこと、それとあいまって魏晋以降への展望がごく簡単に過ぎることがある。周知の如く、内藤湖南の時代区分論において、後漢中期～西晋は、古代・中世の過渡期とされる。本論文は後漢後期、太后輔政が機能不全に陥って歴史的役割を終えたとする。太后輔政は「古代」を特徴付けたわけだが、それではつづく「中世」にはいかなる体制がいかなる経緯でこれに代替したのか、そうした議論があれば、本論文は、漢代のみならず、中国史全体に影響しうる作品となりえたであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2016年2月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。